

# 東京大学大学院博士課程で紛争平和学を学ぶ ユース・太田 陽さんと語る

以下は、2026年4月6日、太田陽さんと大久保賢一日本反核法律家協会会長がオンラインで対談を行った内容を編集部がまとめたものである（文責：事務局）。進行は、当協会の田中恭子事務局が務めた。文中の脚注は編集部による。

## 太田 陽（おおた・あき）さん

東京外国語大学卒業後、東京大学大学院多文化共生・統合人間学プログラム（IHS）に進学し、現在博士課程3年。ガルトゥング平和学を研究テーマに博士論文にとりくむ。高校時代、2年間のアメリカ留学経験を持つ。

### プロフィール



太田 陽さん

## ◆平和学を学ぶきっかけとなったのは…

（大久保賢一会長 ※以下、大久保）太田さんとは、2025年9月に、IALRW JAPAN（International Association of Liberal Religious Women）というNGO主催のシンポジウム「世界終末時計、あと89秒。私たちは止めることができるか」でお会いしたのが初めてだったね。そのときIALRW JAPAN 日本委員長の松井ケティさんに誘われてパネリストを務めたけれども、その場の全体の進行役を務めたのが、太田さんだった。太田さんは、どういうつながりで松井ケティさんと知り合ったのかな。

（太田陽 ※以下、太田）私は大学院に入学してから、ガルトゥング平和学にフォーカスして学ぶようになったのですが、松井ケティ先生とは、そのガルトゥング式の平和実践を研究しているトランセンド（TRANSCEND）研究会<sup>1</sup>の場を通じて出会いました。2023年頃、トランセンド研究会で松井ケティ先生の発表を拝聴して感銘

を受け、ぜひこの方に学びたいと思ったので、連絡をとって、清泉女子大に在籍されていた頃の先生の平和講義に参加させていただきました。トランセンド研究会でちゃんと学び始めたのは、2024年秋学期からだだったと思います。

（大久保）そもそもガルトゥング平和学に興味をもったのは、どんなきっかけだったのかな。



大久保賢一会長

1 ヨハン・ガルトゥング氏によって設立された平和的手段による紛争転換の方途を探求、実践するNGO。詳細は、<https://www.transcendjapan.net/> 参照。

(太田) 修士課程で研究テーマを探していたときに、外大時代から紛争平和研究ゼミに所属していたこともあって、ガルトゥング平和学が自分にとってぴったりくる題材ではないかと、指導教授の梶谷真司先生と相談しつつ決めました。外大時代には、ガルトゥングの「積極的平和・消極的平和」といったごく基礎的な概念を知っている程度だったのですが、やはり平和学の父ともいわれ、平和学の理論の骨組みを創った先駆者の一人でもあるので、ガルトゥングは平和学を専攻するうえでは外せない存在です。ガルトゥング平和学は、国際関係の分野で有名ではありますが、主流とはされていないところがあって、まだ学術的に追求する余地があるのではないかと、梶谷先生からもアドバイスを受けて、ガルトゥング平和学を選ぶことになりました。梶谷先生は、京都大学出身で哲学者なのですが、哲学をより社会実装することを模索されていて、私自身も平和の理論をいかに社会実装するかというところが自身の研究の関心事でもあるので、日頃から親身にアドバイスをいただいています。

(大久保) 外大時代は、どなたの下で学んでいたの。

(太田) 伊勢崎賢治先生のゼミで学んでいました。大久保会長の著書<sup>2</sup>に、ガルトゥングに関することも伊勢崎先生に関することもコメントがあったので、とても驚いています。

#### ◆核と憲法にかかわって

(太田) 憲法9条や核兵器に関しては、伊勢崎先生に接して、見え方が変わったなと思います。核兵器と9条の関係性についても、改めて認識が変わる部分がありました。

日本国憲法とアメリカを含む周囲の国との関係という点で、本当に複雑な位置にいるのだなと実感して。私自身が、核の問題に関心を持つようになったのはごく最近で、2024年に日本被団協がノーベル平和賞を受賞したことも大きなきっかけになりました。これまで、核の問題は複雑すぎると思って避けてきたきらいがあるのですが、やはりちゃんと学ばなければいけないと思い直し、少しずつ勉強し始めました。

認識が変わったというのは、核の問題は一筋縄ではいかない、曖昧にされている部分が多すぎる、という難しさを知ったことです。これまで、非核三原則には法的拘束力がないということも実は知らなくて、法律で決まっているものとばかり思っていました。核兵器に関して、国内法でも国際法でも、縛られている部分も縛られていない部分もあつたりで、戦後日本の状況でアメリカの核に頼らざるを得ないような状況が生み出されています。すぐに核兵器依存から抜け出せるものではないし、かといって、現状維持のままであれば、いつまでたっても核兵器をなくすことにつながらないと思いますが。以前は、核をめぐる日本とアメリカの関係性の堅固さが障害になっていたと思いましたが、法律が絡んでくると、矛盾を消そうとしてもなかなかそうはいかない、日本が足元から向き合わなければいけない問題が多すぎると感じるようになりました。

(大久保) 大事なことだと思う。核兵器が世界に1万何千発も存在し、核抑止論も通用しているという現実の状況を抜きにして、平和の問題を考えるわけにはいかないし、核兵器をなくしていくという規範を抜きにして、平和を語るわけにはいかない。

2 『「核兵器も戦争もない世界」を創る提案』(2021年、学習の友社)145頁以下、『「核の時代」と戦争を終わらせるために』(2022年、学習の友社)142頁以下、外

核の時代に入っているということを見逃して、太田さんも研究を続けていくことはできないでしょう。

太田さんの指導教官は、梶谷先生ということだけれど、核、核兵器だけでなく原子力についても、どんな見解を持っておられるのかな。

(太田) 梶谷先生から、直接、核についての見解をうかがったことはないのですが、市民と触れ合う機会も、官僚と接する機会もお持ちの方なので、官僚の考え方に賛成しているわけではないが、原発に反対する市民に対して、官僚には官僚の論理がある、とコメントされていたことがありました。意見を聴く機会が多ければ多いほど、判断をつけるのは難しく、一言で賛成か反対かと簡単には言えない、と考えておられるのかなと思います。

(大久保) 核兵器であれ原発であれ、核エネルギーを人間が完全にコントロールすることはできないのだから、人類社会そのものがなくなってしまう危険を孕んだ時代に入っているんだね。これは、人間のあり方を考えるうえでは避けて通れない問題で、この視点を抜きにして学問は語れないと思っているから、ある人が核の問題について、どのようなスタンスで語っているのかを、その人の知性、感性、品性を計る指標にしている。それが自分の問題意識のコアの部分にあるんだ。

#### ◆中国をルーツに持って

(大久保) 太田さんと初めて会ったときに、中国がルーツと聞いたと思うんだけど…。

(太田) はい、そうです。両親は二人とも北京出身ですが、私の出生後まもなく離婚しました。母はもともと留学生として日本に来てそのままこちらで就職し、帰化して日本国籍を取得した後、私が生まれていま

す。その後母が日本人男性と再婚するまでの9年間は母子家庭で育ちました。私自身は生まれも育ちも日本なのですが、9歳まで母子家庭だったこともあって、やはり中華色の濃い家庭環境・教育環境だったと思います。それで、中国も自分の祖国という認識は持っていました。家の中では、北京語と日本語が混じり合っていて。

(大久保) 生まれたときからバイリンガルだね。北京語、日本語、英語、他にも何か話せる言語はあるの。

(太田) 最近、韓国語にも手を出しつつあります。平和研究の視点からは、韓国も非常に重要なフィールドだなと思うようになりました。外大時代に、伊勢崎先生から38度線まで行かれたときの話や韓国の総司令官との交流についての話など、いろいろなエピソードをうかがっていたので、以前から韓国に関心はあったのですが、自分にとってのフィールドとしてはっきり認識したのはごく最近です。ちょうどそんな折に松井ケティ先生からのお声がけで、2025年8月には韓国のイクサン（益山）で行われたカンファレンスに参加してきました。ともかくバイリンガルで生まれ育ったことは、私にとってアドバンテージになっていて、とても恵まれているなと思います。

(大久保) 今の米中関係からして、北京語も英語も話せる日本の平和学研究者といたら、鬼に金棒だろう（笑）。

(太田) 米中関係を語り出すと、根本的な思想の違いが対立軸になっていて、そこに日本も関わってくると本当に複雑だと思います。私は高校時代にアメリカに留学していたので、アメリカに対しても親近感があります。中国にルーツがあって、日本で生まれ育ち、アメリカにも、という3層構造の立ち位置は悩ましいものがあります。ただ、中国をみていると、政治体制や長い歴

史の中で培われた伝統に大きな矛盾を感じます。それを、アメリカが武力や経済制裁で圧力をかけるのも間違っていると思いますが、中国にも変えるべきやり方、捨てるべき伝統や習慣はあると思います。

(大久保) 太田さんがここは変えた方がいいと思う、中国の政治的な問題や歴史的な伝統とは、具体的にどういうところなのか。

(太田) 一つには、汚職の問題です。政治の世界ではどんな国でも多少の差はあれ汚職はあると思うのですが、中国の場合は桁違いです。汚職で儲けた人は、海外に豪邸を買って自分の子女を海外留学させています。そうして教育に恵まれた優秀な人材は帰国することなく、どんどん海外流出してしまうという実態がありますね。一方で経済的に恵まれない人は、まともに教育を受けられず国内でくすぶってしまうという現実もあります。これは政治の世界にとどまらず社会一般に浸透していて、教育現場でも教師にホンパオ（紅包）<sup>3</sup>を渡すか渡さ

ないかで、子どもに対する待遇がまるで違って来る、という話を身近な人から聞いたことがあります。社会全体にお金中心主義がはびこっていて、経済に強く、何でもビジネスにつなげられるし、お金の物を言わせれば何とでもなるという風潮が根強いと思います。

そして、伝統的に、自分より上位の人には絶対に逆らえない、という慣習があります。アメリカ留学時代には、どこにいても、教師であろうと先輩であろうと同等に扱われますし、逆にこちらが少しへりくだった態度をとると変な目でみられます。教師に対しても、対等に意見を述べてそれでけんかになったとしても、後にかえって仲良くなるという経験をしました。中国ではあり得ないことです。根拠があって、正しいと思える限りは、上位の人に対しても主張すべきだし、また上位の人も受け入れるべきだと思います。中国のこういう伝統的な慣習は変えていくべきですし、西洋の文化で見習うべきポイントだと思います。



韓国イクサンのカンファレンス

3 祝祭日や特別な機会に贈られる現金入りの赤い封筒。参考資料：Red envelope, Wikipedia, [https://en.wikipedia.org/wiki/Red\\_envelope](https://en.wikipedia.org/wiki/Red_envelope)



韓国イクサンのカンファレンス スピーカー席

#### ◆学びを将来に活かす

(大久保) 太田さんは、博士課程を修了したらどんな道に進もうと考えているのかな。

(太田) 平和学の分野は、机上の理論だけでは成り立たず、社会での実践を基にしてこそより説得力をもって発信できる、と指導教授からよく言われます。研究職に進みたいと思ったこともありましたが、今はイラン戦争やガザ・イスラエルの状況などを見るにつけ、自分で何もできないのが歯がゆく思うようになり、自分の学んだ平和理論を活かせる場所、たとえば国際機関や報道機関といったところに身を置きたいと思うようになりました。何かしら今の情勢にかかわれるような職種に就きたいと考えています。分野横断的・地域横断的なプログラムで学んでいるので、固い専門性よりは、幅広い分野を扱えるという強みを活かして、報道系や政策策定に実際に携われる

ポジションに就ければと。今、一番関心のあるのが、平和教育の分野です。今の日本の平和教育のあり方は、現実的な国際情勢に見合っていないように思います。世界で紛争が起きている状況にあって、どう平和を実現していくかという生産的な議論ができるように、クリティカルな思考力と言葉だけではなくどのように実践につなげるかという社会実装能力を育てる教育、日本ではそれに力をいれなければならないという危機感を感じています。

ガルトゥング平和学で重要なポイントは、「考えの転換」にあると思います。日本では核はなくさなければといいながら、実際にはたくさんの原発が存在し、プルトニウム大国という現実もあります。その矛盾からどう抜け出すかというときに、原発に代わる発電方法・技術はないのかと考えて、創造的に問題を乗り越えていく。そういう「考えの転換」力を、自身ももっと身につけていきたいですし、発想の転換が生まれやすい社会・コミュニティをつくっていく、これが自分の一番やりたいことなのかなと思います。

(大久保) 国際機関でいえば、もちろん国連組織もあるけれど、ICAN やピースポートといった国際 NGO もあるね。ピースポートに乗ったことはある？

(太田) いえ、ないです。

(大久保) ピースポートのスタッフは、太田さんの問題意識に共感してくれると思うよ。通訳スタッフとして乗船する手もあるし、被爆者はじめいろいろな人とのつながりをつくるにはいい機会になるんじゃないかな。

(太田) これまで被爆者の方との接点といえば、最近長崎に旅行した際、被爆三世か四世の方で、高校時代には平和大使を務められたこともある広島出身の女性に案内

していただいたことぐらいでしょうか。私と同世代の方ですが、長崎の被爆の歴史に詳しいだけでなく、日本が第二次大戦中に行った加害の問題にも非常に目配りされていて、加害の歴史を扱った資料館にも連れて行ってもらいました。その資料館にはガルトウングの学説なども展示されていましたね。構造的暴力、社会的な枠組みの中で、日本による加害が引き起こされたし、被爆者は日本人だけでなく朝鮮の方、台湾の方、アメリカの方もいた、こういう広い射程で被爆の問題を捉えている方でした。私自身、中国のルーツも持っているので、どちらの立場も気持ちもわかるし、大きな学びになりました。

◆これからの社会に必要なと思うこと、今、一番訴えたいこと

(太田) 今、どの世代でもあるいは世代間でも、対話が少ないなと感じています。ガルトウング平和学では、対話は紛争を乗り越えるための必須のツールでありスキルであると位置付けられています。自分の周りのコミュニティだけではなく、自分と対立する意見の人の話もきちんと聴くことができ



長崎にて



長崎原爆資料館にて

るような度量の大きさは、結局対話で養われるものだと思います。私自身、異なる文化の狭間で育ってきたので、つらいことも多かったですが、双方の気持ちも、互いに分かり合えない気持ちも、分かるようになりました。これから先、私たち若い世代がコミュニケーションスキルを身につけることで、世界を牽引する能力も育つのではないかと思います。10年後の世界がよくなるか悪くなるかは、私たちの世代がどのような行動をとるかによって変わってくるだろうと思いますし、その行動を選択するための分別力が求められていると思っています。世の中には文化や歴史を背景に、いろいろな基準や価値観があると思いますが、分別力を持つには、何かしら絶対的な基準、時を超えて変わらない価値観を学ぶ必要を感じます。私自身、歴史の変遷にあっても普遍的な、絶対的な価値観とは何なのかを学ぶために、これからも研究に励もうと思っています。

(大久保) 今の太田さんと同じ年齢のときに、司法試験に合格しました。合格するまで法務省で仕事をしていただけでも、このまま自分の人生を終えるのはつまらないなと思って弁護士になろうと思った。その頃と今とで、何が一番大きく変わったかといえば、自分が望んでいること、考えていることを言語化できるようになったこと

じゃないかな。核兵器も戦争もない世界を創る、それに尽きるんだけど、核兵器も戦争もない世界を創ることは可能だし、自分の残りの人生のエネルギーをかけよう、という言語化ができるようになった。それは、何を自分が求めているのかを一生懸命考えてきたからではないかと思う。憲法という言葉でいえば「恐怖と欠乏から免れて平和のうちに生存」できる、これが実現される世界を創ろうということ。日本国憲法は、核の時代の最先端の知恵が詰め込まれていると思う。弁護士になって事務所を開いたときに、「くらしに憲法を生かそう」というスローガンを掲げて、この50年働いてきた。だから、いろいろな夢をふくらませて、それを実現しようとしている太田さんの話には、大きな共感を持ったし、これからもメールを送ります。

～～～（対談を終えて）～～～

太田陽さん、大久保会長、お二人ともお忙しい中、貴重なお時間をいただき、誠に有難うございました。

太田さんには率直に思いを語っていただき、大久保会長からはこれまた率直な応答がありました。

欲を言えば、太田さんが大久保会長に訊いてみたいことをうかがう時間をつくれなかった（進行役の責任です）ことが少々残念です。

太田さん、研究にお忙しい日々と思いますが、大久保会長に訊いてみたいことがありましたら、いつでもご連絡ください。また、リアルでお目にかかれる機会があれば、楽しいひとときを過ごせたらと思います。今後ともよろしく願いいたします。

（進行：田中恭子）



左から 進行：田中恭子・大久保賢一会長・太田 陽さん